

研究タイトル：近代日本における「実在」の問題
：宗教的経験・純粹経験・病床経験をめぐって



氏名：	島田 雄一郎 / SHIMADA Yuichiro	E-mail：	shimada@oshima-k.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	日本思想史学会、日本倫理学会、日本宗教学会、日本文芸研究会		
キーワード：	近代思想史、実在、経験、認識論、医療思想、老年学、負担、教養		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・近代日本の思想の歴史 ・明治期の医療と医療者の思想 ・読書、文章作成に関する技術 		

研究内容：

(1) 近代の認識論と宗教的経験

カント哲学の誕生により近代の認識論が確立され、物事を認識する際の認識主体と認識の対象の間が厳密に分けられ、主体に物事それ自体の認識は不可能であり、表象(主体に認識された物事)のみが認識可能とされるようになった。これにより、学問的には、リアリティ(実在)の捉え方に変容が起こった。一方でこのように学問分野における実在観の変容が起こっていたが、他方で自己の宗教的経験に基づき「世界」のリアリティ(実在)について語る言説も展開されていく。そして、後者の中には、認識論との取り組みを通して自己の経験の妥当性を吟味する言説もあらわれる。こうした言説の分析を通して、宗教的経験をめぐる言説における認識論との取り組みとリアリティ(実在)の有様について研究している。

(2) 近代日本の「純粹経験」論の展開

近代日本において「純粹経験」とは、W.ジェイムズの”Philosophy of Pure Experience”に共鳴した西田幾多郎『善の研究』によってよく知られるようになった表現と概念である。西田は同書で、みずから経験したリアリティ(実在)を「純粹経験」として概念化することに努めた。この西田の「純粹経験」論は、近代の認識論との取り組みを経た上で形而上学を新たに確立しようとした試みとして捉えることができる。同様に、哲学という学問領域では「実在する神」「永遠」を主題にした波多野精一の宗教哲学があり、「純粹経験」という表現こそ用いていないが、認識論との取り組みを経て、自己の「経験」に基づきリアリティ(実在)の概念化に挑んだ点に共通性が認められる。こうした哲学における自己の「経験」に基づくリアリティ(実在)の概念化の有様とそうした哲学の動向の展開について研究している。

(3) 近代日本の医療者の思想史的研究：臨床における人間の「心」の〈癒し〉をめぐって

近代日本の医療者の思想として、本研究の主題は臨床(治療)における病者の「心」の有様をいかに医療者が捉えているかということと、病者の「心」の〈癒し〉をめぐる医療者の対応である。近代日本の医療者の大きな課題となっていたのが臨床(治療)における人間の「心」の有様であった。言い換えれば、理論的には機械論的発想に基づき「心」の有様を捨象しながら、臨床(治療)においては対象が人間であるために「心」の有様を避けては通れないという、現在に至るまで続く医療現場の課題に、西洋医学の本格的な受容が始まった明治期から医療者は直面していた。近代日本の一部の医療者は、思索の領域が医学を超えた広がりを持っていた。例えば臨床(治療)における宗教的信仰の意義について考察したり、狭義の哲学の知見に基づき人間とは何かを改めて問い直すことから医学・医療の本質を再考したりするなど、医療が臨床(治療)において直面せざるを得ない病者の「心」の有様に、医療者は様々な形で向き合おうとした。こうした営為の中に、いわゆる近代科学一般とは異なる日本の近代医療の特質が見られ、そうした特質も本研究を通して探求している。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	